

# うえの

十二月号  
第116号



## 12月の東京のお天気

日	天気	晴	曇	雨	雪	最低 気温	六曜
1日	日	61	7	19	0	4.4	先負
2日	月	61	12	14	0	4.2	仏滅
3日	火	61	11	15	0	3.9	大安
4日	水	56	14	16	1	3.6	赤口
5日	木	64	12	9	2	3.4	先勝
6日	金	59	14	14	0	3.2	友引
7日	土	66	8	11	2	3.0	先負
8日	日	64	10	13	0	2.8	仏滅
9日	月	62	9	14	2	2.6	大安
10日	火	64	7	14	2	2.4	赤口
11日	水	62	10	13	2	2.3	先勝
12日	木	63	10	14	0	2.1	友引
13日	金	67	8	9	3	2.0	先負
14日	土	60	11	14	2	1.8	仏滅
15日	日	65	9	9	4	1.7	大安
16日	月	62	11	14	0	1.6	赤口
17日	火	62	9	12	4	1.6	先勝
18日	水	71	4	10	2	1.5	友引
19日	木	63	10	12	2	1.4	先負
20日	金	61	16	9	1	1.3	大安
21日	土	65	9	10	3	1.2	赤口
22日	日	60	7	17	3	1.1	先勝
23日	月	64	7	12	4	1.0	友引
24日	火	68	5	13	1	0.9	先負
25日	水	65	9	11	2	0.8	仏滅
26日	木	60	13	12	2	0.7	大安
27日	金	65	8	11	3	0.5	赤口
28日	土	59	11	14	3	0.4	先勝
29日	日	64	8	11	4	0.3	友引
30日	月	67	10	7	3	0.2	先負
31日	火	65	13	7	2	0.0	仏滅

【註】この表は気象庁創立以来87年間の毎日の天気を集計したものです。  
例えば31日の火曜日は晴が65回、雪が2回あったことを示します。（東京気象庁調べ）

12月号 No.116  
上野のれん会発行  
定価 50円

# わたしの上野

田中克己

公園では五月一日にマーデーの行列があり  
朴の木がよく咲くのが何本かあった  
精養軒で披露をした美男の後輩は  
今年がちょうど銀婚式だそうだ  
わたしの上野はそのあと焼けて  
本郷の台から浅草、本所、深川が見晴らせた  
昭和二十年三月十二日  
わたしが応召のお別れに大学の先生をおたずね  
した時だった

先生はその日は大学をお休みだった！  
(今はもう亡くなられて七年になる)  
わたしの思い出は兵隊になり  
華北で戦死していたら、きっと家のない  
焼けた上野がゆめに出るだろうと思った  
いまの上野は美術展が栄え  
動物園で鳥獣が朝夕に鳴き  
おいしい物や良い品を売る店があつて  
わたしはそこをうろろ歩く  
この幸せを一度でも死んだ戦友たちに教えたい  
今日は兵長だった大工さんとつらかった日を語  
ったが  
あいつらはつらい目をして今日のことを知らない  
からだ  
わたしの幸せなことも知らないからだ



# レンブラントと オランダ絵画 巨匠展

国立西洋美術館にて  
12月22日まで(月曜休館)  
9:30-5:00  
火・金・土曜日は7:まで  
小・中学生 200円  
高・大学生 300円  
大人 350円



ピーター・デ・ホー「デルフトの家の中庭」

を売っている屋台があった。

赤、青、黄などのゴム風船を、あれで、十ばかり買ったであろうか。

駆け落ち者を、ホームから、まさか送るといことは、さすがに、気がさして、では、と、さりげなく、駅の外でみ送って、そこで、風船を空に飛ばそうということになった。

ひと通り、もう、試験もすぎたから、二月の末か、それとももう、三月に入っていたか。

いまにも、まるで、雪でも降ってきそうな、くらく、どんよりとした午後で、そんなこんなで、いつもよりも、一層、上野のステンショがわびしく、かなしいものに見えるた。

男は、学生服の上にオーバーを着て、ふちの広いソフトを、前のめりにかぶっている。こっちは、めったにいったことはないのだけれど、いつだか、神宮の球場にいったら、シートから声を掛けるのがいたので、みたら、そのともだちである。

ベレを、まっ平に、まるで大黒頭巾かなんぞのようにかぶって、ステッキの上に手をのせたりしていたので、その場で、おい、ベレは、もう少し気取ってかぶんな、と、いつてやったことがある。

そんな男だから、亭主のある、下宿のかみさんなんぞ

## 編集後記

▽サル年に明けた今年もはや12月と押し迫り、あわただしい中にも一珠の淋しさを感じます。  
▽さて今月の中村正義画伯の表紙絵はグッと趣を変えてみました。題して「源平合戦」百号の大作の部分ですが、この絵は昭和39年度芸術祭参加映画、小林正樹監督作品『怪談』の内「耳なし芳一」の劇中に使われた壇ノ合戦場面を再現すると莫大な制作費を必要としますが、それを補うための策として中村画伯が絵筆をとられたものです。セットやロケ以上の迫真力があり絶賛を博し、その翌年の朝日新聞社秀作展に選ばれ、中村画伯の代表作と折紙をつけられたものです。

と、駆け落ちをするようなことになる。女は、風呂敷包みをひとつだけ、そっと持っていた。

たしか、三人で、万歳といったような気がする。風船が、そんな空に、ひよるひよると舞い上り、すぐ、ステンショの屋根の向うに消えていった。△終▽

(作家)

十二月号 No. 116

一九六八年十一月二十五日 印刷  
一九六八年十二月一日 発行  
(毎月一日発行)

定価五十円  
編集人 岡本 寛  
発行人 須賀 利雄  
印刷人 大橋 貞雄  
印刷所 共同印刷株式会社  
東京都文京区湯島三丁目四五番六号  
(池の端ビル) 〒No.113  
上野のれん会編集部  
電話(電)八〇一六・八〇一七

この雑誌は上野のれん会加盟店で  
さしあげております。定期購読ご希望の  
さしあげております。直接編集部までお申  
み下さい。(半年分三〇〇円、一年分  
分六〇〇円。送料は一部六円です)  
なお、毎号ご愛読いただく方のた  
めに、美しい一年分の合本ファイル  
を編集部に用意しております。一個  
一〇〇円です。(送料は実費)